

歴史を未来へと繋ぐ者たち

16世紀後期にベトナムで制作された陶磁器製の燭台であり、寺院で使用されていたと考えられる褐釉藍彩貼花龍文燭台。上部と下部の二つの部分に分かれ、淡い黄土色の本体に龍文・花文・如意文など様々な文様で装飾を施した後、褐釉と藍釉を掛け分けて彩色されている。

修復を担当したのは、東京藝術大学大学院文化財保存学専攻保存修復工芸研究室の北野珠子氏、石原道和氏、藤井茉弥氏の3名。修復工程の中で直面した課題や発見、また修復分野における人材育成について、お三方に語っていただいた。



修復前

修復後

褐釉藍彩貼花龍文 燭台

通高86.0cm、最大幅26.0cm、
胴径22.5cm、底径22.0cm (修復後)

申請者	町田市立博物館 (現在休館中。2029年に リニューアルオープン予定)
事業名	町田市立博物館所蔵 ベトナム陶磁修復事業
事業実施期間	2021年10月～ 2022年9月
修復事業者名	東京藝術大学大学院 文化財保存学専攻 保存修復工芸研究室 北野珠子氏(教授) 石原道和氏(非常勤講師) 藤井茉弥氏(博士2年) ※肩書は修復当時のもの

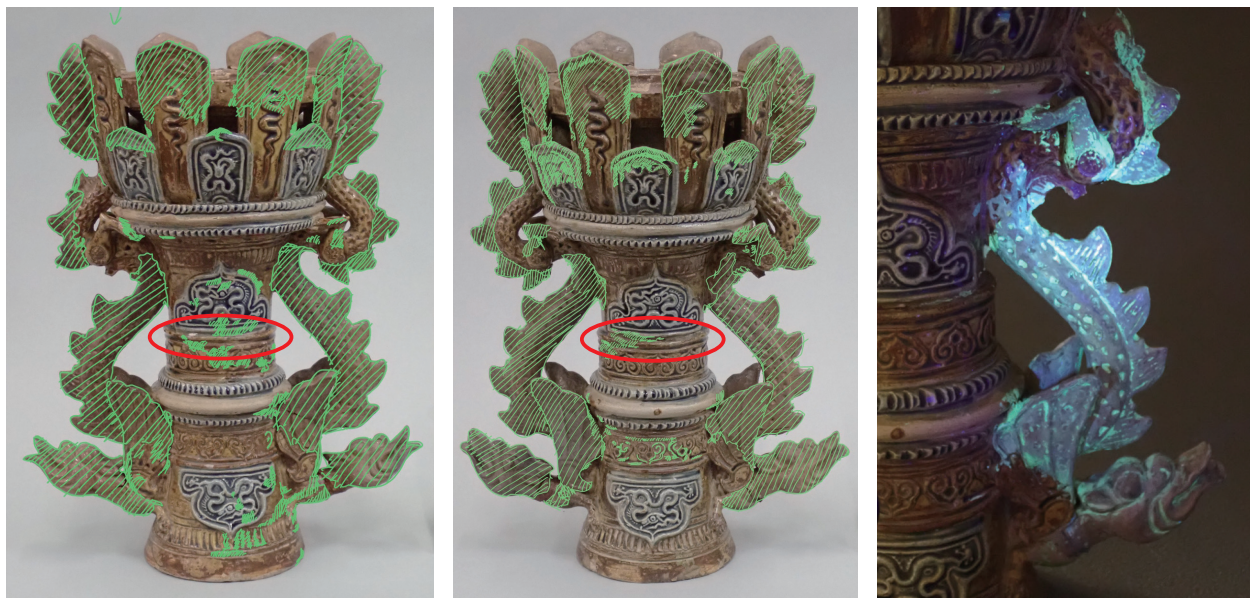
16世紀ベトナム陶器修復 現代と未来に「本来の姿」を問う

北野氏

町田市立博物館所蔵品の修復も、またこの法量のベトナム陶器の修復も初めてでしたが、縄文土器の復元に長く携わっている石原さんと、事務処理能力に長ける教育研究助手の玉川みほのさん、陶芸を専門としてきた藤井さんというメンバーが揃っていたので、今なら町田市立博物館のニーズに応えられると思い、本件の修復を引き受けました。修復は、洗浄・解体→再接合→補填→補填部分の着彩という工程で進めていきましたが、洗浄してみた時は衝撃でしたね。

石原氏

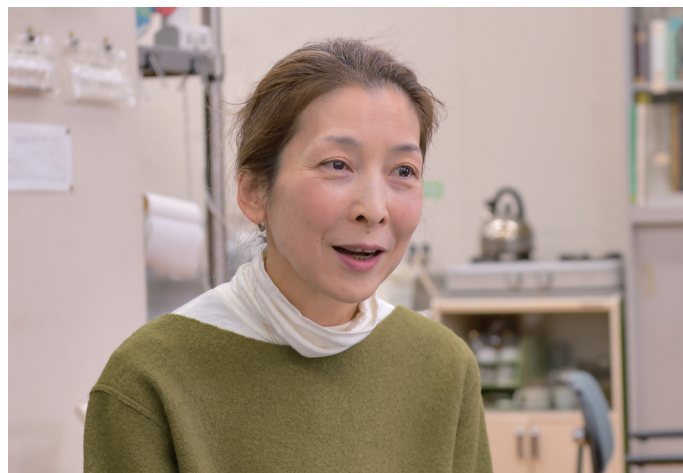
補彩部分を取れば、オリジナルが出てくるといったらほとんどなくて、紫外線を当ててみたら燭台の両側にある龍の部分はほぼ蛍光反応が見られ、過去に修復された箇所が圧倒的に多かったんです。当初は『どうしようか』と途方に暮れたほどでした。



緑の斜線部分は、紫外線灯を照射した時の蛍光箇所。大部分が既に修復されていることが分かる。

北野氏

実は町田市立博物館の学芸員の方も「どうも龍の表情が産地や時代に合わない」と思われていたようで、再修復で検討したい課題の一つだとお話しされていました。藤井さんは保存修復の教育を受けているので、再修復で復元するにしても推定の姿という点では結局同じなのではと心配してくれました。それは一理あります。一方でベトナムは国土が戦場になったこともあり、本格的な調査研究が開始されて日が浅い。特に現存する類例の少ない本作品は、現時点での学術的根拠に基づいた姿に復元し、公開することで新たな情報を得られる可能性が期待できます。それが美術史や技法史の発展につながるわけなので、学芸員の方と確認を重ねながら復元に取り組むことにしました。もちろん、修復の記録はすべてつけ、どこを復元したのかもわかるようにし、復元箇所の補填材や補彩材は取り除けるよう可逆性を持たせることにしました。



北野珠子教授

藤井氏

こうした方針のもと、修復作業を進めていったところ、さまざまな発見がありました。例えば龍の顔や胴、尾の補填部分には心材に金属線が用いられており、その金属線と作品の固定には強力な接着剤が使われていました。またその金属線の上から小石を詰め込んでいてかなりの力技で固定していたことが分かりました。

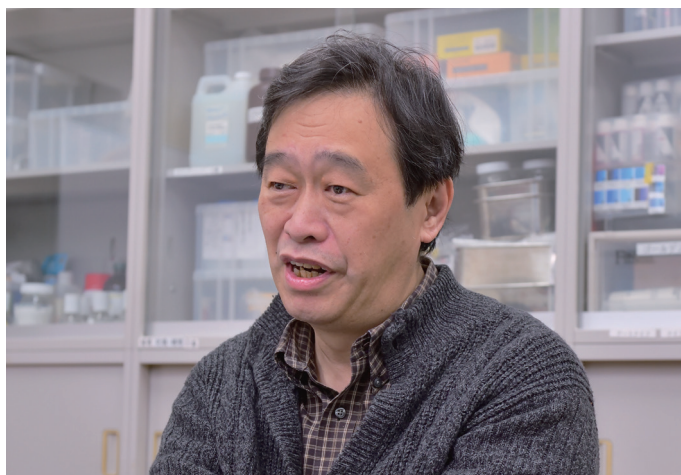
また龍の腹の模様は若干左に傾いて付いており、模様を延長すると龍の頭自体も多少左に傾く造形になることが分かりました。ろくろ引きして焼いた際に土が回転した方向に多少戻る「焼戻り」という現象がありますが、この上部の基本造形はろくろ引きで作り、型押しして成形した龍を後で付けたものと考えられます。単に左に傾いてしまったのかもしれませんが、もしかしたら焼戻りを意識して、意図的に左に傾けて龍を付けていた可能性もあるのではないかと考えています。



胴体と龍は、金属線と小石と強固な接着剤で固定されていた。
接着剤を溶剤で除去することが困難であったため、超音波メスを使い、少しずつ物理的に取り除いていった。

石原氏

龍の型にも面白い発見がありました。龍の鱗を見ると左右非対称なんです。片側は鱗の形が均一なので型で成形し、もう片方は手で鱗を書いたのではないかと。両方の型を作るのも結構大変なので、効率化を優先して片方だけの型を作ったのではないかと考えています。



石原道和
非常勤講師

北野氏

上部蓮弁部の旧修復部分を洗浄・解体してみると、根元から粘土の塊が出てきたんですね。蓮弁を支える目的で入れたのでしょうか。これを見て、本来の蓮弁は修復前のものよりも長かったと推察でき、復元する時の寸法を考える手がかりになりました。解体することで、当時の技法が見えてくる。これは修復作業の醍醐味だと思います。

また今回、町田市立博物館の許可も頂いて、当大学の近くの東京国立博物館でX線CT調査を行ってもらいました。外側から見えなかった製作の痕跡もわかりましたし、立体文化財のX線CT画像を多く見ている調査担当者からの意見もうかがえ、さまざまな学びがありました。それを今、藤井さんが論文としてまとめたいと励んでいるところです。



左が修復前の上部、右が修復後。同時代の作品の剣先拓本写真から長さ、幅、傾きを決め、町田市立博物館からの資料と協議を元に龍のレリーフが2匹向かい合うデザインとした。また本作品は蓮弁装飾を多用していることから、先端は剣先型ではなく、蓮弁型に造形した。

藤井氏

貴重なベトナム陶器の文化財の修復を担当でき、かつ北野先生、石原先生、また町田市立博物館の学芸員の方にも多くのご指導を頂き、修復1年目で本当に素晴らしい機会を頂きました。石原先生からは「キワが一番大事」ということを教わりました。



藤井茉弥氏

石原氏

欠損部、いわゆる失われた部分のキワが重要だと考えています。キワをぎりぎりまで見る、そこが一番面白いところで、あきらめちゃだめだと。そのぎりぎりの1mmのところに爪の跡があったりする。今回はそこに注目したことで、龍の首の付け根がちょっと左を向いていることがわかったわけですね。「キワを見逃すな」ということは今回藤井さんに伝えられたんじゃないかなと思っています。

北野氏

今回復元した龍には、口の横に空気孔があります。これは「同時代のベトナム陶器の龍に多く見られる特徴である」と藤井さんが町田市立博物館に提案したことで、実現しました。依頼主から指示を受けるだけでなく、自らも提案していけることが修復者にとって必要な能力の一つです。今回発揮してくれた自主調査能力とコミュニケーション能力の高さに、藤井さんの成長を感じました。

藤井氏

北野先生と初めてお会いしたのは、私が陶芸の修士の時に参加したオーストリアにあるロースドルフ城での陶磁器調査の時です。修復の分野はそれまで全く関りがなかったのですが、北野先生とお話しして、貴重な文化財を実際にじっくり観察して触れることができる点に魅力を感じて、今の研究室への進学を決めました。修復の際に得られる情報は圧倒的に多くて、自分の制作にも生かせる環境でもあると感じています。

石原氏

文化財の保存修復という仕事は、理系と文系どちらの学問も必要であり、しかも手先を使うという他にはない特徴を持った仕事で、こんなに面白い仕事はないと思うのですが、今課題だと感じているのは、そうした魅力がなかなか世間に知られていないことです。認知度が低いために予算がつかず、それが原因で生業として成り立たず、担い手が増えないという悪循環に陥っています。そのような中で、三菱財団の助成活動を通じて、文化財保存修復の仕事を広く社会に発信し、未来を担う人材育成につなげてもらえるのは本当にありがたいことです。

もう一度同じような文化財の修復に関われるならばもっとうまくやれるはずと思うのですが、実は1点1点が一期一会な出会いで、同じような文化財に出合うことはほとんどありません。それぞれに違う発見があり、それを見つけた時の嬉しさ、ワクワクする楽しさを多くの人に体験してもらいたいと思っています。

北野氏

修復者には、専門知識はもちろん、豊富な現場経験や博物館、美術館、修復者同士のネットワークを有することも非常に重要な要素です。これらは1、2年で身につくものではありません。だからこそ、人材を常に育て続けなければ、今のような高いクオリティで修復に対応することが難しくなってしまいます。文化財保存学という分野がそのような特徴を持っているのだという認識が、もっと広がっていけばと思っています。



2024年12月 東京藝術大学大学院文化財保存学専攻 保存修復工芸研究室にて